

第 34 回

関西臨床スポーツ医・科学研究会

抄 録

会 期：2025年6月14日(土)

会 場：奈良女子大学 総合研究棟（文学系S棟）

「S235」教室

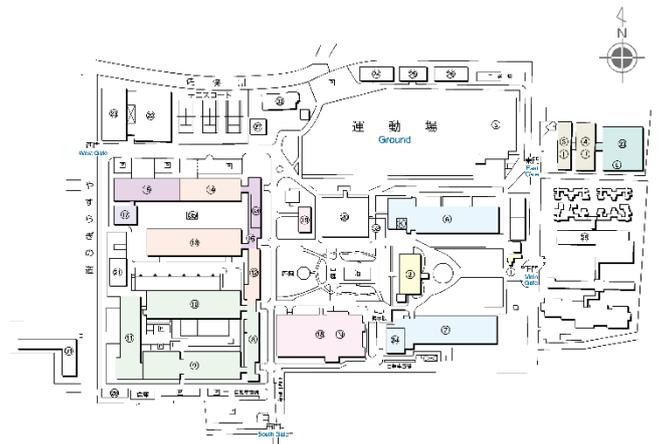
会 長 笠次 良爾

国立大学法人奈良国立大学機構

奈良教育大学 教育学部 保健体育講座 教授

● 日 時 2025年6月14日 (土曜日)
研究会 9:30~17:30

● 会 場 奈良女子大学 総合研究棟 (文学系S棟) 「S235」教室
奈良県奈良市北魚屋東町



京都から

- 近鉄京都線で近鉄奈良駅まで特急約35分、急行45分+徒歩約5分

新大阪から

- JR東海道本線で大阪駅へ、JR大阪環状線（外回り）で鶴橋へ、近鉄奈良線（快急・急行）で近鉄奈良まで約60分+徒歩約5分
- JRおおさか東線で久宝寺駅へ、JR大和路線でJR奈良駅まで直通快速で約60分+バス5分+徒歩約5分

大阪から

- JR大阪環状線（外回り）で鶴橋へ、近鉄奈良線（快急・急行）で近鉄奈良まで約50分+徒歩約5分

難波から

- 近鉄奈良線（快急・急行）で近鉄奈良まで約35分+徒歩約5分

三宮から

- 阪神なんば線・近鉄奈良線（快急・急行）で近鉄奈良まで約70分+徒歩約5分

天王寺から

- JR大和路線快速でJR奈良駅まで約30分+バス5分+徒歩約5分
- JR大阪環状線(内回り)で鶴橋へ、近鉄奈良線（快急・急行）で近鉄奈良まで約45分+徒歩約5分

関西国際空港から

- 空港バスでJR奈良まで約100分+近鉄奈良までバス5分+徒歩約5分
- 南海空港急行で難波へ、近鉄奈良線（快急・急行）で近鉄奈良まで約110分+徒歩約5分
- JR関空快速で天王寺へ、JR大阪環状線（内回り）で鶴橋へ、近鉄奈良線（快急・急行）で近鉄奈良まで約100分+徒歩約5分

大阪空港から

- 空港バスでJR奈良まで約80分+近鉄奈良までバス5分+徒歩約5分
- 空港バスで難波へ、近鉄奈良線（快急・急行）で近鉄奈良まで約70分+徒歩約5分

- | | | |
|--|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 正門・守衛室 (重要文化財) Main Gate / Reception (Important Cultural Property) ② 記念館 (重要文化財) Memorial Hall (Important Cultural Property) ③ 法人本部棟 Administration Hall ④ 公認産産棟 Accredited Center ⑤ 講堂 Auditorium ⑥ 総合研究棟 文学系A棟 International Language Center ⑦ 総合研究棟 文学系S棟 S Hall (Faculty of Letters) ⑧ 総合研究棟 理学系A棟 A Hall (Faculty of Science) ⑨ 総合研究棟 理学系C棟 C Hall (Faculty of Science) ⑩ 理学部C棟 C Hall (Faculty of Science) ⑪ 総合研究棟 生活系A棟 A Hall (Faculty of Human Life and Environment) ⑫ 総合研究棟 生活系D棟 D Hall (Faculty of Human Life and Environment) ⑬ 総合研究棟 生活系E棟 E Hall (Faculty of Human Life and Environment) ⑭ 大学院E校 E Hall (Graduate School of Humanities and Sciences) ⑮ 大学院F校 F Hall (Graduate School of Humanities and Sciences) ⑯ DMG MORE 工学系H棟 DMG MORE Building (Faculty of Engineering) | <ul style="list-style-type: none"> ⑰ 学術情報センター (別館図書棟) Academic Information Center (Library Annex) ⑱ 保健管理センター Health Care Center ⑲ 学生会館 University Union ⑳ R・I 総合演習室 Radioisotope Laboratory ㉑ 第1体育館 Gymnasium ㉒ 第2体育館 Gymnasium ㉓ 文化センター共用施設 Culture Center Shared Facility for Department Activities ㉔ 音楽棟 Music Hall ㉕ 海外運動サークル施設 Facilities for Overseas Student Clubs ㉖ 学生寮 Student Dormitory ㉗ 国際文化情報棟 International Culture Information Building ㉘ 寄居舎・国際学生協会 Dormitory / International Student House ㉙ 仮居舎 (同窓会) Temporary Residence (Alumni Hall) ㉚ 国際交流会館 International Exchange Center ㉛ 国際交流プラザ International Exchange Plaza ㉜ コラボレーションセンター STFAM・総合教育開発機構 臨床心理相談センター 飯島館 Collaboration Center / Research Institute for Innovative STEAM Education Center for Clinical Psychology / Aoki Office | <ul style="list-style-type: none"> ㉝ 大学ラウンジ SHI Gaid Dear deer Lounge, RRI Dear deer lounge ㉞ 中庭二作室 Courtyard ㉟ 整備総務課、企画課 General Affairs, Planning Division ㊱ 総務・学務、財務課、施設課、情報課 Finance, Classes, Information Division ㊲ 国際課 International Division ㊳ 学務協力室 Research Cooperation Division ㊴ 学生センター Center for Access Services ㊵ 学務課 (2期) Educational Affairs Director ㊶ 学生生活課、入試課 (1期) Student Support Center / Entrance Examination Director ㊷ 学術情報課 Library and Academic Information Division |
|--|--|--|

※駐車場はありません。車でのご来館はご遠慮ください。

※学会当日は土曜日となりますので、構内へは東側の「正門」からのみ入場可能です。

(南側の「南門」は、入場不可です)

一般演題

演題1～演題18

(9:30～12:17)

「高校剣道選手の性差と股関節に着目した身体的特徴」

大西准史1)、貴志真也2)

1) 社会医療法人スミヤ角谷整形外科病院 診療技術部 理学療法士科

2) 宝塚医療大学 和歌山保健医療学部 リハビリテーション学科

【背景と目的】

スポーツ選手において、可動域の左右差が蓄積されることで、怪我や慢性疼痛のリスクが高まる可能性があると言われている。しかし剣道は左右非対称の動作を繰り返す競技であるものの、その特性と股関節の可動域に与える影響については十分に検討されていない。本研究では、高校剣道選手の股関節可動域の左右差および性差を評価し、それに基づいて障害予防のための適切なケアやトレーニング方法の指標を得ることを目的とする。

【方法】

2022年から2024年の期間で、和歌山県下国体強化選手に選ばれた高校生（男性38名、女性24名）を対象に以下の調査を行った。

Straight Leg Raise (SLR)、股関節可動域（屈曲、伸展、外旋、内旋）を日本整形外科学会が定める方法で測定し、性別ごとに左右比較を行った。統計学的分析はWilcoxon符号付順位和検定を用い、有意水準を各々5%未満とした。

【結果と考察】

高校剣道選手の身体的特徴として左股関節内旋制限を認めた。（男子 $p=0.00016$ 、女子 $p=0.00083$ ）また性差として、男子の特徴的な身体的所見は右外旋可動域の低下を認め、女子では、左SLRの低下を認めた。本研究により、高校剣道選手ではSLRおよび股関節回旋可動域において左右差が顕著であることが明らかとなった。これらの左右差が蓄積されると、姿勢の不均衡や運動器障害のリスクを高める可能性があるため、適切なストレッチやトレーニングを導入することが重要である。

【結論】

本研究では、高校剣道選手においてSLRおよび股関節回旋可動域に有意な左右差が存在することを示した。この左右差は、剣道の構えや踏み込み動作に起因し、長期的な怪我や慢性痛のリスク要因となる可能性がある。これらのリスクを軽減するために、剣道選手は左股関節内旋評価を行い、適宜指導が必要である。性差を考慮すると、男子では、右股関節外旋、女子では、ハムストリングスに着目した評価とコンディショニング指導を行うことが、障害予防の観点で重要と考える。

「大学生アスリートにおける足趾把持筋力、足部形態、バランス能力の種目別特徴」

濱口幹太1), 露口亮太1,2), 小林実優1,2), 橋本雅至3), 仲田秀臣1,2), 大槻伸吾1,2)

- 1) 大阪産業大学 スポーツ健康学部
- 2) 大阪産業大学大学院 人間環境学研究科
- 3) 奈良学園大学 保健医療学部

【目的】

足部機能は、スポーツパフォーマンス向上や傷害予防において重要な役割を果たす。足趾把持筋力 (TGS)、足部形態、バランス能力は、それらを評価する上で重要な指標である。そこで、大学生アスリートを対象に、種目別の特徴を明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象は、男子大学生アスリートで、体操選手 (A群, 4名)、空手選手 (B群, 9名)、剣道選手 (C群, 15名)、バスケットボール選手 (D群, 35名)、バレーボール選手 (E群, 19名)、陸上競技短距離選手 (F群, 6名)、陸上競技長距離選手 (G群, 19名) とした。測定方法として、TGSは、左右最大値の平均値を体重で補正した体重比TGSを採用した。足部形態は、10%と50%の荷重条件で計測し、足背高を切頂足長で除してAHIを算出した。閉眼片足立ちは、裸足立位姿勢から閉眼状態にし、最大保持時間は120秒とした。

【結果】

10%AHI (左足) は、D群 (0.323 ± 0.027) がC群 (0.342 ± 0.013) と比して有意に低値を示し ($p = 0.03$)、10%AHI (右足) は、D群 (0.325 ± 0.023) がA群 (0.351 ± 0.006) およびC群 (0.354 ± 0.021) と比して有意に低値を示した (ともに、 $p < 0.01$)。閉眼片足立ち (右足) は、C群 (40.7 ± 28.0 秒) がB群 (103.6 ± 24.2 秒) およびD群 (90.5 ± 40.6 秒) と比して有意に低値を示した (B群 vs C群 : $p = 0.02$, C群 vs D群 : $p < 0.01$)。体重比TGS, 50%AHI (左右), 閉眼片足立ち (左足) には、群間に有意差が認められなかった。

【結語】

本研究では、大学生アスリートの足部形態およびバランス能力には種目ごとの特性を認めたが、TGSにはみられなかった。これらの結果を考慮し、アスリートのパフォーマンス向上や傷害予防について今後の検討が必要であることが示唆された。

「和歌山県下のゴールデンエイジにおけるFMS測定の性差分析」

恩賀 敦也1)、小林啓晋1)、貴志真也2)

1) 社会医療法人スミヤ 角谷整形外科病院 診療技術部 理学療法士科

2) 宝塚医療大学 和歌山保健医療学部 リハビリテーション学科 理学療法学専攻

【背景と目的】

FMS (Functional Movement Screen) は、スポーツ選手のパフォーマンス向上や傷害予防のためのスクリーニングツールとして活用される。しかし、成長期のジュニアアスリートにおけるFMSの測定結果に性差がどのように影響するかについての知見は少ない。本研究では、和歌山県のジュニアアスリートを対象にFMS測定を実施し、各測定項目における性別による違いを明らかにすることで、発育・発達に応じた適切なトレーニングプログラムおよび傷害予防の指標としての有用性を検討する。

【方法】

和歌山県の小学生スポーツ選手129名（男子69名、女子60名、10～12歳）を対象とした。身長は男子145.0±6.0cm、女子143.2±7.3cm。体重は男子36.2±5.2kg、女子33.3±4.8kgであった。FMS測定を実施し、7つの測定項目（Deep Squat、Hurdle Step、Inline Lunge、Shoulder Mobility、Active SLR、Trunk Stability Push-up、Rotary Stability）におけるスコアを記録した。性別による違いをカイ二乗検定により分析し、有意水準を5%未満とした。本研究を行うに際し、実験の主旨や目的などを書面ならびに口答で選手に説明し同意を得ておこなった。

【結果と考察】

Active SLRおよびHurdle Stepにおいて、男性のスコアが低く女性のスコアが高い傾向を示し、有意差が認められた ($p<0.01$)。Trunk Stability Push-upでは、男性のスコアが高く女性のスコアが低い傾向を示し、有意差が認められた ($p<0.01$)。その他の項目では有意差は認められなかった。Active SLRにおける女性の優位性は、女性の柔軟性の高さによる影響が示唆される。一方で、Trunk Stability Push-upにおける男性の優位性は、体幹筋や上肢の筋力の高さに起因すると考えられる。

【結語】

本研究の結果は、ジュニアアスリートにおける性差を考慮したトレーニングプログラムの開発に有用な情報となる。FMSは、運動機能の評価や傷害予防のための有効なスクリーニングツールとして活用できる可能性がある。

「プロスポーツ選手における口腔内状況」

鈴木真幸1), 豊田博紀2)

- 1) やすらぎデンタルクリニック
- 2) 大阪大学大学院歯学研究科

【背景と目的】

う蝕や歯周病などの歯科疾患、咬合状態、顎関節の状況あるいは口腔内清掃状態などは、口腔の健康に影響を与えると共に、スポーツ選手のコンディショニングやパフォーマンスと密接な関係がある。本研究では、プロスポーツ選手における口腔内状況について一般成人と比較し、考察をおこなった。

【方法】

静岡県のチームに在籍するJリーグおよびFリーグ選手318名を対象とした。正常咬合を有し、顎関節に障害のないことを確認した。年齢の平均は、26.6歳、身長は平均177.0 cm、体重は平均71.6 Kgであった。また、実験の主旨や目的などは、スタッフおよび選手に説明し、同意を得ておこなった。そして、口腔内状況を観察した。口腔内状況として、未処置歯:Decayed teeth (DT)、欠損歯:Missing teeth (MT)、処置歯:Filled teeth (F)を診査し、一人平均DMF歯数およびDMF歯率を算出した。

【結果と考察】

プロスポーツ選手318名の平均未処置歯数は0.2本、平均欠損歯数は0.2本、平均処置歯数は4.0本であった。一人平均DMF歯数は4.4本、DMF者率は75%であった。同年代の一般成人と比較すると、これらの指数は低い値を示した。

【結語】

プロスポーツ選手は口腔健康度が高く、歯のケアに対する意識が高いことが示唆された。

「バレーボール選手における急性中心血液量減少時における脳循環および呼吸循環の動的応答：起立性調節障害の新たな治療戦略の可能性」

フィーリー 真利奈¹、和多田 智樹¹、嶋田 愛¹、伊藤 剛³
澤井 亨²、仲田 秀臣^{1、2}、大槻 伸吾^{1、2}、宮本 忠吉^{1、2}
1)大阪産業大学大学院 人間環境学研究科
2)大阪産業大学 スポーツ健康学部
3)森ノ宮医療大学 鍼灸学科

【背景と目的】

起立性調節障害を有する患者は、立位時に静水圧の変化における血圧低下で脳血流が減少し、失神やめまいなどを誘発する。起立性ストレスに対する呼吸循環応答の初期相が生体恒常性維持に重要な役割を果たすことが示唆されているが、長期的な跳躍トレーニングがこれらの応答に及ぼす影響は明らかでない。そこで、健常者[Non-Ath]とバレーボール選手[Ath]における中心血液量(CBV)減少時の脳循環、心血管系、呼吸調節の初期反応を比較し、長期間の跳躍トレーニングによる統合的な呼吸循環調節機能の適応の検討を目的とした。

【方法】

男性31名 (Non-Ath : n=16、Ath : n=15) を対象に下半身陰圧負荷(LBNP)による-45mmHgの負荷を2分間×3セット実施した。呼気ガス諸量は質量分析装置にてbreath-by-breath法で測定し、心拍数はテレメータ心電図計にて1拍毎に記録し、脳血流は経頭蓋超音波ドップラー法にて連続記録した。血圧は自動血圧計にて30秒毎に記録し、胸部アドミタンスはCBVの指標とした。解析は3セットの平均値を用いた

【結果と考察】

LBNPによる胸部アドミタンスの変化率に群間 (Non-Ath群とAth群) ×時間 (経時的変化) の有意な交互作用が認められた ($p < 0.01$)。両群で分時換気量、呼気終末二酸化炭素分圧の有意な低下と心拍数の有意な上昇が観察された (主効果 時間 $p < 0.001$)。呼吸数において有意な群×時間の交互作用が認められ ($p < 0.05$)、Ath群でより顕著な初期呼吸抑制の継続が確認された。中大脳動脈平均血流速度には群間差を認めなかった。

【結語】

ジャンプ習慣を有するバレーボール選手は健常者と比較し、CBV減少初期からの呼吸抑制が継続することが明らかとなった。この競技特異的な適応は、急激な血行動態変動時における脳血流維持能の向上に寄与する可能性が示唆された。これらの知見は、起立性調節障害の新たな治療法開発や、強い重力を受ける機会の多い戦闘機パイロットや宇宙飛行士の耐重力トレーニング開発に重要な科学的基盤を提供するものである。

「低頻度の高強度インターバルトレーニングがアスリートの呼吸循環機能に及ぼす影響」

嶋田 愛*, 和多田 智樹**, フィーリー 真利奈*, 伊藤 剛*
澤井 亨**, 仲田 秀臣*,**, 大槻 伸吾*,**, 宮本 忠吉*,**

* 大阪産業大学 大学院 人間環境学研究科

** 大阪産業大学 スポーツ健康学部

【背景と目的】

超高齢社会における健康寿命延伸の課題に対し、効率的な運動法の開発が求められている。我々は先行研究で、週1回3セットの高強度インターバルトレーニング (HIIT) が従来の週3回以上の持久カトレーニングと同等以上の効果を持ち、一般健常人では月2回のHIITでも最大酸素摂取量 (VO₂ max) が有意に向上することを示した。しかし、アスリートにおける低頻度HIITの効果は未解明であった。そこで本研究では、月2回のHIITがアスリートの呼吸循環機能に及ぼす影響を調査した。

【方法】

部活動所属の男子アスリート9名を対象に、自転車エルゴメータを用いた月2回のHIITを4か月間実施した。トレーニングは最大到達負荷量の80~90%強度で疲労困憊まで行い、3分休憩後に3セット繰り返した。トレーニング前後でVO₂ max、最大仕事量 (WRmax)、疲労困憊までの時間 (Exhaustion Time) などを測定した。

【結果と考察】

月2回のHIITによりVO₂ max (+4.3%、 $p < 0.03$)、WRmax (+2.7%、 $p < 0.03$)、Exhaustion Time (+55.6%、 $p < 0.02$) が有意に向上した。先行研究の月4回のHIITでは13%のVO₂ max向上が見られたのに対し、本研究では4.3%にとどまり、トレーニング頻度の低下に伴い効果が減少することが示された。アスリートでさえ低頻度で効果が得られるという事実は、一般人や高齢者においてはより顕著な効果が期待でき、健康寿命延伸のための有効な戦略となる可能性がある。

【結語】

高い呼吸循環機能を有するアスリートにおいても月2回の低頻度HIITの有効性が実証された。この結果は、効率的なトレーニングプログラムの開発や、運動適応現象の時間的理解という基礎的研究課題にも重要な示唆を与えるものである。

「高校生アスリートにおけるスポーツ科学授業の学習効果について」

山口 裕士¹⁾、笠次 良爾²⁾

1) 奈良教育大学教職大学院 2) 奈良教育大学保健体育講座

【背景】

インテリジェントアスリートの育成には、体系的な知識の習得が重要である。しかし、高校生アスリートを対象に、スポーツ科学に関する授業を通じた知識習得の効果を検証した研究は少ない。

【目的】

本研究では、高校生アスリートに対するスポーツ科学の授業が知識習得に与える影響を検証することを目的とする。

【方法】

運動部に所属する高校生を対象にアンケート調査を実施した。対象者は、スポーツ科に所属し「スポーツ科学」の授業を受講している高校1・2年生（計76名）と、スポーツ科以外に所属しトレーニングを実施する高校1・2年生（計62名）の2群に分けた。アンケートの回収率は59%であった。調査内容は、複数の教科書を基に高校生向けに作成した10問の設問で構成され、その内容はNSCA-CSCS資格を有する3名のストレングスコーチにより検討された。

【結果と考察】

1年生では、スポーツ科の生徒は「関節の可動域」「運動面」「パワー」「アスレティックリハビリテーション」に関する4問で高い正答率を示した ($p < 0.05$)。2年生では、「関節の可動域」「運動面」「パワー」「トレーニングの原理」「プログラムデザイン」「医療機関の受診」「応急処置」に関する7問で、スポーツ科の生徒の正答率が高かった ($p < 0.05$)。一方で、「三大栄養素」に関する設問では、スポーツ科以外の生徒の正答率が高かった ($p < 0.05$)。また、スポーツ科内での比較では、2年生は「トレーニングの原理」「プログラムデザイン」「応急処置」の3問で正答率が高く、1年生は「運動面」の設問で2年生より正答率が高かった ($p < 0.05$)。本研究の結果から、解剖学やバイオメカニクスといったスポーツに関する専門知識は、体系的な授業を通じて効果的に習得できることが明らかとなった。一方で、栄養学など他教科でも学習する一般的な知識については、スポーツ科学授業の有無にかかわらず習得されている可能性が示唆された。

「育成年代の女子新体操競技における外傷・障害調査」

岡田 七海¹⁾、小川 宗宏²⁾

1) 奈良県立医科大学 医学部医学科

2) 奈良県立医科大学 スポーツ医学講座

【背景と目的】

女子新体操は、特異な動作や広い関節可動域、高度な巧緻性が求められる競技であり、技術習得には長時間の練習が必要となる。そのため、オーバーユースによる障害が発生しやすい。しかし、育成年代の女子新体操選手におけるスポーツ外傷・障害の実態に関する報告は少ない。本研究は、その実態と特性を明らかにすることを目的とした。

【方法】

大阪府・奈良県の中高一貫校に所属する女子新体操部の選手77名（中学1年生～高校3年生）を対象に、無記名自記式アンケートを実施。過去および現在の外傷・障害歴、女性アスリートの三主徴（FAT）に関する認知を調査した。

【結果】

85.3%の選手が過去に外傷・障害を経験し、68.2%が現在も何らかの障害を抱えていた。障害の多い部位は、腰部（41.5%）、足部・足関節（32%）、膝（30.2%）、股関節（13.2%）であった。病院受診率は51%と低く、多くの選手が痛みを抱えながら練習を継続していた。また、23.4%の選手に疲労骨折の既往があり、特に第2中足骨の疲労骨折が多かった。さらに、女子新体操は審美性が求められる競技であり、体重管理の影響から低栄養・低エネルギー状態に陥りやすい。そのため、スポーツ医学で問題視されている「女性アスリートの三主徴（female athlete triad : FAT）」の関与が示唆された。しかし、FATに関する認知度は0%であった。一方で、84.4%の選手が障害予防のための専門医による定期健診の必要性を感じていると回答した。

【考察と結語】

育成年代の女子新体操選手では、外傷・障害の発生率が高く、練習環境の特性上、十分な休息が確保しにくい実態が明らかとなった。障害の要因として、トレーニング強度・時間、フロアの硬さ、競技特性、栄養状態、リカバリー不足などが関与していると考えられる。障害予防には、個体因子・環境因子を総合的に分析し、適切なリカバリーの確保や栄養管理を含めた包括的アプローチが必要である。指導者と情報を共有しながら、障害予防に向けた啓発活動の強化が求められる。

「腰椎分離症患者におけるランニング時の腰仙部動態」

浅香孝至^{1,2}),中尾哲也³),吉田隆紀³),相原望^{1,4}),安本慎也¹),柳田育久¹),大槻伸吾⁵)

1) 医療法人貴島会ダイナミックスポーツ医学研究所

2) 関西医療大学大学院保健医療学研究科

3) 関西医療大学保健医療学部理学療法学科

4) 大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科

5) 大阪産業大学スポーツ健康科学部スポーツ健康学科

【背景・目的】

腰椎分離症（分離症）の臨床症状としてランニング時の腰痛が報告されている。しかし、分離症患者のランニング動作を調査した報告は見受けられない。本研究の目的は、分離症患者におけるランニング時の腰仙部動態を調査することとした。

【対象・方法】

対象は、2024年4月から2025年2月に18歳以下で片側性分離症と診断された患者のうち装具療法を行わず競技継続した10例（S群、平均14.5歳）と腰部および下肢に障害のない患者10例（C群、平均14.2歳）とした。

方法は、慣性計測装置（センサ）を第3腰椎と第1仙椎直上に装着し、トレッドミル上で最大歩行速度に対する100%(Slow running)および120%(Fast running)の速度でランニングを行った。サンプリング周波数1000Hzで3軸加速度および角速度データを収集した。解析区間は、初期接地から次の同側初期接地の1ランニング周期とした。収集した角速度データを用いてランニング中の各センサ間の角度を算出した。健側および患側の初期接地を基準にした1ランニング周期中の最大値と最小値の差を変化量と定義し、腰椎伸展・回旋・側屈・仙骨前傾の変化量を算出した。それぞれ3ランニング周期分の平均値を代表値とした。各項目をS群とC群で比較検討した。

【結果】

2群間の患者背景で有意差は認めなかった。Slow runningは、全ての項目において有意差を認めなかった。Fast runningでは、腰椎回旋変化量（S群/C群）において健側5.56°/3.66°、患側5.43°/4.10°とS群が有意に高値を示した。（ $P<.05$ ）。その他の項目に有意差は認めなかった。

【結語】

S群はC群に比べ、Fast runningで健側および患側の腰椎回旋変化量が高値を示した。分離症患者はランニング速度の増大に伴い、過剰な腰椎回旋運動が生じている可能性が示唆された。

「中学男子バスケットボール選手における慢性足関節不安定症と身体機能の関連」

中久保拓哉 1)、高木律幸 1)、木村健太郎 1)、中西雄稔 1)
内藤要 1)、兼子秀人 1)、村上元庸 1)、辻拓真 2,3)、山本隼年 4)

- 1) 医療法人社団 村上整形外科クリニック
- 2) 京都橘大学 健康科学部 理学療法学科
- 3) 社会福祉法人 京都博愛会病院 リハビリテーション科
- 4) 流通科学大学 人間社会学部 人間健康学科

【はじめに】

バスケットボールは足関節捻挫の発生率が高く、慢性足関節不安定症（以下、CAI）との関連も指摘されている。先行研究では、高校生を対象としたCAIと身体機能の関連の報告があるが、中学生は筋骨格が未発達で身体機能との関連が異なる可能性がある。しかし、中学生バスケットボール選手に関する研究は少なく、実態は不明である。そこで、本研究では、中学生男子バスケットボール選手におけるCAIと身体機能の関連を調査した。

【方法】

対象は中学生男子バスケットボール選手42名で、Cumberland Ankle Instability ToolによってCAI群15名とコントロール群27名に群分けし、以下の項目を比較した。基本情報では年齢、身長、体重、BMIを評価した。柔軟性評価ではFFD、SLR、HBD、股関節内旋・外旋、足関節背屈を評価した。パフォーマンス評価ではStar Excursion Balance Test(以下、SEBT)、片脚立位、サイドホップテスト、を評価した。また、アンケート調査では去年の捻挫発生率を聴取し、1年間のスポーツ損傷調査で捻挫発生率を調査した。

【結果】

CAI群はコントロール群と比較して体重、BMIが有意に高値で、SLR、サイドホップテストが有意に低値であった。また、その他の項目には有意差は認められなかった。

【考察】

本研究においては足関節背屈可動域の制限やSEBT、片脚立位に有意差は認められず、高校生以上を対象とした先行研究と異なる結果となった。SEBTや片脚立位も動的安定性の評価に用いられるが、これらは主にバランスの制御を評価するのに対し、サイドホップテストは横方向の動作に対する足関節の安定性が強く求められる。この特性の違いが、先行研究と異なる結果となった可能性がある。また、中学生年代におけるCAIは動的不安定性を呈するものの、高校生年代と比較して骨形態の変化が少ないために、足関節背屈制限が生じなかった可能性が考えられ、中学生年代での足関節の動的安定性向上が今後の機能障害の予防に重要であることが示唆される。

「大学男子サッカー選手の足関節外傷・障害リスク因子に関する検討」

小松 猛、坂本 和大

びわこ成蹊スポーツ大学

【背景と目的】

サッカー競技において足関節の外傷・障害は最も多い傷害の1つである。今回、ハイレベルでプレーしている大学男子サッカー選手に起こる足関節外傷・障害のリスク因子について、競技背景、外傷・障害の既往歴、身体状況などから検討を行った。

【方法】

2024年関西学生サッカーリーグ1部のチームに所属してプレーをしていた男子大学生サッカー選手のうち、シーズン前に足関節のメディカルチェック（MC）を行った32名を対象とした。

これらの選手の中で、シーズン中に足関節の外傷・障害を起こしてトレーニングから離脱した選手5名（7件）とそれ以外の27名に対して、MCのアンケートから得られたサッカーの競技歴、足関節捻挫の既往の有無と受傷回数、以前の傷害に対する治療内容と離脱期間、エコー検査から得られた内外果の剥離骨片の有無や靭帯の状態、前方不安定性について比較することで、足関節外傷・障害のリスク因子について検討した。

【結果と考察】

シーズン中に足関節外傷・障害を起こした5名7件の傷害内容は、骨折（陳旧性含む）3件、靭帯損傷3件、慢性足関節不安定症（CAI）1件で、離脱期間は靭帯損傷・CAIでは22日～46日、骨折では101～247日であった。傷害を起こした選手はそれ以外の選手と比較して、以前の足関節傷害の治療でギブス固定、エコー検査での内外側の骨・靭帯の異常、前方不安定性を認めた割合が大きく、受傷前からの器質的・機能的異常が影響している可能性が示唆された。

【結語】

ハイレベルでプレーする大学サッカー選手において、以前に長期の固定をした症例、骨・靭帯に器質的異常や関節不安定性を認める症例では、足関節外傷・障害を起こすリスクがあるため予防の対策を取る必要があると考えられる。

「大学陸上競技選手における足趾把持機能と下肢傷害の関連について」

古屋颯太1)、濱口幹太2)、大槻伸吾1,2)、露口亮太1,2)

1) 大阪産業大学大学院 人間環境学研究科

2) 大阪産業大学 スポーツ健康学部

【背景と目的】

足趾把持筋力 (TGS) をはじめとする足趾把持機能が様々なアスリートの身体機能や傷害予防に与える影響が注目されている。しかし、陸上競技選手において傷害との関連については十分に解明されていない。そこで、本研究では大学陸上競技部における足趾把持機能の特徴と下肢傷害との関連性について検討した。

【方法】

対象は、陸上競技部に所属する男子選手17名であった。

調査項目は自記式質問紙にて傷害調査を実施した。傷害調査についてはFIFAも推奨するFullerらによる傷害の定義を基に設問項目を設けた。

傷害分類は部位別にA群：足関節および足部・足指、B群：大腿・下腿部、C群：既往歴なしの3群に分類し集計した。測定項目はTGS、アーチ高率、足趾巧緻性、足趾柔軟性を実施した。

【結果】

下肢に既往歴を有した選手は13名であった。部位別に見ると、A群は5名、B群は8名であり、C群は4名であった。足趾把持機能を3群間で比較した結果、左足TGSにおいて群間に有意な差を認めた ($p = 0.02$)。多重比較検定の結果、B群 ($21.3 \pm 6.3\text{kg}$) とC群 ($32.6 \pm 1.7\text{kg}$) との間に有意な差を認めた ($p = 0.03$)。その他の測定項目には、群間に有意な差を認めなかった。

【考察】

TGSの低下は足部の安定性を損ない、機能の低下を招くことが指摘されており、傷害リスクを高める要因になると考えられる。

一方で、TGS以外の指標に有意な差が認められなかった事から、足趾把持機能が傷害発生に与える影響は限定的である可能性も考慮し、他の身体機能との関連も検討する必要がある。

【結語】

既往歴を部位別に分類し、足趾把持機能と下肢傷害との関連を検討した結果、TGSが関連する可能性がみられた。今後、多様な集団を対象とした研究が必要であり、測定項目を拡大し、詳細な傷害調査を実施するとともに他の身体機能との関連も検討する必要がある。

「足底腱膜症に対する集束型体外衝撃波治療後の再発に関連する因子の検討」

○佐々木 勇人¹、平井 玲奈¹、井之元 亮太¹、杉岡 辰哉¹、河口 泰之¹

¹ 阪奈中央病院 スポーツ関節鏡センター

【背景】

腱障害に対する集束型体外衝撃波治療(FSW)の有効性は数多く報告されている。足底腱膜症(PF)の長期予後に関して、一部の患者は再発を繰り返す可能性があることが報告されているが、FSW治療後の再発に関して調査した報告は少なく、再発に関連する因子を明らかにすることで、再発防止の一助となる可能性がある。

【目的】

本研究は当院でのPFに対するFSW治療後の再発率と再発に関連する因子を調査することとした。

【方法】

対象は、当院にてPFに対するFSW実施し、疼痛が改善した131足。評価項目は、照射プロトコル、スポーツ歴、照射側(片側または両側)とした。再発の定義はFSW治療後に疼痛が軽減した後、NRSが2以上増加した症例とした。

再発なし群と再発群にて群間比較を行い、2群間比較にて有意差を認められた項目で二項ロジスティック回帰分析を行った。

【結果】

PFに対するFSW治療にて疼痛が改善した131足の内、再発は11足であり、再発率は8%であった。群間比較にて、照射側に有意差を認め、再発群11足の内、10足が両側であった。二項ロジスティック回帰分析にて、障害側が両側であることが有意な変数だと選択された。

【考察】

当院におけるPFに対するFSW治療後の再発率は過去の報告と同程度かそれ以下であった。PFの長期予後として、両側性の踵の痛みは予後不良因子である。本研究においてもFSW後の再発に関連する因子として、照射側が両側であることが影響していると示唆された。

「ノルディックハムストリングエクササイズによるハムストリング肉離れ後の筋力評価」

坂本 和太、深田 稜太、小松 猛

びわこ成蹊スポーツ大学

【背景と目的】

近年、サッカー競技ではプレー強度の向上に伴い、骨格筋傷害が増加しており、特にハムストリングの肉離れ（HSI）は骨格筋傷害の約3割を占める。また、再発リスクは2~3割と非常に高いことが報告されており、予防戦略を立てることの重要性が指摘されている。ノルディックハムストリングエクササイズ（NHE）が肉離れ予防に有効であることは示されており、NHE中の筋力特性と障害発生との関連性についても近年注目されている。そこで、本研究の目的は、HSIから競技復帰した選手のNHE中の筋力を評価し、再発リスクとの関連性を検討することである。

【方法】

対象は大学男子サッカー選手22名とし、HSI復帰後2カ月以内の選手7名（G1）、HSI復帰後3カ月から8カ月以内の選手2名（G2）、HSIを1年以上受傷していない選手13名（G3）とした。また、G1のうち同部位の肉離れを再発した選手は2名であった。ハムストリングのエキセントリック筋力の測定は、左右のアキレス腱部にロードセンサーを固定し、NHE中にかかる負荷を定量化することで行った。試技は3回2セットの計6回実施し、筋力の最大値を採用したうえで、体重あたりの筋力および左右の非対称性を算出した。統計処理には対応のないt検定を用い、G2はサンプル数が少ないため検定から除外した。

【結果と考察】

体重あたりの筋力はG3がG1より有意に高かった（ $p = 0.002$ ）、また、左右の非対称性はG1が有意に大きい値を示した（ $p = 0.049$ ）。復帰後2カ月を経過しても左右の筋力差が大きく、再発のリスクが残存している可能性が示唆された。また、再発した2名の選手は患側だけでなく健側の筋力も低い傾向がみられた。

【結語】

HSIを受傷した選手は、NHE中のエキセントリック筋力が非受傷者と比較して低いことが確認された。そのため、NHEの筋力評価はHSIの再発予防の指標となる可能性があり、受傷側の筋力は長期的に低下することが示唆された。

「競技選手における膝前十字靭帯再建術後の膝関節筋力の回復経過-移植腱別の比較-」

相原望^{1,2)}、橋本祐介¹⁾、山崎真哉³⁾、柳田育久²⁾、池田樹広¹⁾、浅香孝至²⁾、大槻伸吾⁴⁾

1)大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科

2)医療法人貴島会ダイナミックスポーツ医学研究所

3)東京スポーツ&整形外科クリニック

4)大阪産業大学スポーツ健康学部スポーツ健康学科

【背景と目的】

近年、大腿四頭筋腱(QT)を用いた膝前十字靭帯再建術(ACLR)が注目されているが、膝関節筋力の経時的変化を他の移植腱と比較した報告は少ない。本研究では競技選手を対象に、骨付きQT(QTB)を用いたACLRの膝関節筋力を調査し、ハムストリング腱(HT)、骨付き膝蓋腱(BTB)を用いたACLRと比較検討した。

【方法】

対象は2018年4月から2024年3月にQTBまたはBTB、HTで初回ACLRを施行し、35歳未満、受傷前Tegner activity scale(TAS) 7以上、術後12カ月まで追跡できた患者のうち、傾向スコアマッチングにより性別、Body Mass Index(BMI)に基づいてQTBとHTとマッチングさせた、92例(QTB34例、BTB35例、HT23例)を対象とした。患者背景および術後3、6、12カ月(M)時の等尺性膝伸展・屈曲筋力健患比(%)を測定し、比較検討を行った。

【結果と考察】

膝伸展筋力は3、6MでQTB($67.1 \pm 14.8 / 80.6 \pm 14.4\%$)、BTB($68.9 \pm 15.6 / 80.4 \pm 11.6\%$)がHT($83.7 \pm 12.2 / 93.1 \pm 10.5\%$)に比べ有意に低値であった。膝屈曲筋力は3、6、12MでQTB($87.7 \pm 9.8 / 92.5 \pm 8.9 / 96.3 \pm 8.0\%$)、BTB($90.6 \pm 14.5 / 94.8 \pm 11.5 / 99.2 \pm 8.5\%$)がHT($71.4 \pm 11.8 / 81.6 \pm 11.6 / 86.1 \pm 9.2\%$)に比べ有意に高値であった。他の項目で有意差は認めなかった($P < .05$)。

【結語】

QTBを用いたACLRでは、膝伸展・屈曲筋力ともBTBと同等の回復経過を示した。HTとの比較では術後早期に膝伸展筋力は低下するものの、12Mでは同等の回復を認めた。またHTではQTBおよびBTBに比べ膝屈曲筋力の低下が12Mまで残存した。

「前十字靭帯再建術後における内側広筋の回復時期と関連因子の検討

— Quadriceps Setting評価を用いた後ろ向き研究 —

秋津 英之¹⁾、島本 大輔^{1,2)}、神頭 諒³⁾、吉矢 晋一³⁾

1)西宮回生病院 リハビリテーション部

2)平成医療福祉グループ総合研究所

3)西宮回生病院 整形外科

【背景】

前十字靭帯再建術（ACLR）後には関節因性筋抑制（AMI）が生じやすく、特に内側広筋（VM）の収縮力低下が問題となる。VMのAMIは膝伸展筋力の回復を妨げ、再損傷リスクや競技復帰時のパフォーマンスにも影響する可能性がある。VMのAMIを評価する方法としてQuadriceps Setting（QS）が用いられるが、回復時期については明らかになっていない。そこで、本研究の目的は、ACLR後のVMのAMI回復時期を明らかにし、その回復に関連する因子を検討することである。

【方法】

2017年～2024年にACLRを受けた160名163膝を対象とした。VMのAMI回復の判断として、(1) QSでVMの収縮が目視可能、(2) QS時にVMを押しても潰れない時点と定義した。カルテ記録を後ろ向きに調査し、これら2条件のいずれかが確認された週を回復時期とした。関連因子として、性別、年齢、身長、BMI、術前リハビリの有無、術前評価項目（Heel height difference、膝伸展可動域、等尺性膝伸展筋力のWeight Bearing Indexと患健差）、および使用グラフトの種類を抽出した。統計学的解析には回復時期の検討に χ^2 検定、回復時期と各因子の関連は重回帰分析を用い、有意水準は5%とした。

【結果】

回復時期は術後1週89名、2週59名、3週46名、4週36名、5週22名、6週以降8名となり、術後1週までに回復した症例が最も多かった（ $p < 0.05$ ）。重回帰分析では有意な因子は認められなかった。

【結論】

ACLR後のVMのAMIが、術後1週までに回復する例が多かったが、回復時期に影響を与える特定の因子は認められなかった。先行研究では関節腫脹による求心性感覚入力の変化がAMIを惹起し、腫脹量と大腿四頭筋AMIが関連すると報告される。本研究の限界としては、後ろ向き研究で腫脹評価を抽出できなかった点が挙げられる。今後はVMのAMIの回復程度を定量化できる評価方法の検討や、VMのAMI回復時期が、急性期以降の膝伸展筋力や競技復帰時期などへの影響を経時的に追跡・検討する必要があると考えられる。

「膝前十字靭帯再建術後超早期の筋力が術後6ヶ月の筋力に与える影響」

○飯田 健1)、橋本 祐介2)、南 智稀1) 3) 津本 柊子1)

西野 吉哉1)、池淵 充彦4)、瀬口 貴一4) 寺井 秀富1)

大阪公立大学医学部整形外科1) 大阪体育大学2) 辻外科リハビリテーション病院3)

大阪公立大学医学部リハビリテーション科4)

【はじめに】

膝前十字靭帯 (ACL) 再建術後のリハビリテーションは、術後スポーツ復帰させるために早期からの筋力回復が重要である。しかし、術後超早期の筋力測定は再建靭帯への負荷が懸念される。今回、我々は術後2週に比較的再建靭帯に負荷がかからず測定可能であるロコモスキャンを用い筋力評価を行い、術後6ヶ月の筋力に与える影響を調査した。

【対象と方法】

ACL再建術後20例を対象とした (QTB 11例、BTB 2例、ST 7例)。ロコモスキャンによる等尺性膝関節伸展筋力を術後2週と術後6ヶ月、Cybexによる等速性膝関節伸展筋力を術後6ヶ月に測定し、健側・患側共にピークトルク体重比 (体重比) を算出しSpermanの順位相関係数にて検証した。

【結果】

ロコモスキャンの術後2週と術後6ヶ月における体重比で健側 ($r = 0.759$)、患側 ($r = 0.635$) 共に有意な相関を認めた ($P < 0.05$)。また、術後2週のロコモスキャンと術後6ヶ月のCybexにおける体重比で健側 ($r = 0.595$)、患側 ($r = 0.564$) 共に有意な相関を認めた ($P < 0.05$)。

【考察】

ACL再建術後の筋力評価には様々な機械が用いられている。ロコモスキャン術後2週とCybex術後6カ月の膝関節伸展筋力で正の相関を認めたことから、ロコモスキャンの使用も有用な可能性がある。また、ロコモスキャン術後2週と術後6カ月の膝関節伸展筋力で正の相関を認めたことから、術後2週の筋力が高値であれば術後6カ月の筋力も良好であり、術後超早期の筋力が重要である可能性が示唆された。

【結論】

ロコモスキャンを用いた筋力評価にて、術後2週から術後6カ月の膝関節伸展筋力で正の相関を認め、術後6ヶ月のCybexによる膝関節伸展筋力と正の相関を認めた。

「小学生の成長に伴う静的立位重心動揺の変化～3年間の縦断研究による学年間の比較～」

小林征平1) 橋本雅至2) 濱口幹太1) 大槻伸吾1) 3)

1) 大阪産業大学大学院人間環境学研究所 2) 奈良学園大学保健医療学部

3) 大阪産業大学スポーツ健康学部

【背景と目的】

平衡機能低下は転倒とスポーツ傷害の要因とされ、成長期の小学生には、バランス能力の発達が必要な運動発達に重要である。本研究は、小学生の重心動揺変化を3年間追跡し、身体発達と平衡機能発達の関係を検討し、転倒やスポーツ傷害予防に資する知見を得ることを目的とした。

【方法】

令和3年度から令和5年度に在学した小学生197名（男子109名、女子88名）を対象に、身長、体重と重心動揺検査の95%信頼楕円面積、総軌跡長、平均移動速度、X軸・Y軸平均移動速度を測定し、身長補正值から学年間の変化率を算出した。統計処理は各隣接学年の変化率が0と異なるかを1標本t-検定で分析した。重心動揺変化率と体格変化率（身長・体重）の相関をPearsonの積率相関係数で分析した。有意水準は5%とした。

【結果と考察】

各隣接学年の重心動揺変化率を比較検討したがいずれの学年間においても変化率に改善が認められ、それぞれの差は有意であった。一方、一部の学年間に重心動揺変化率の有意な増加がみられ、男子は1-2年生で95%信頼楕円面積が増加し、女子は4-5年生の95%信頼楕円面積、平均移動速度に増加が認められた。各学年間の重心動揺変化率と体格変化率の相関を検討した結果、重心動揺変化率で有意な増加を認めた男子の1-2年生では95%信頼楕円面積と体格変化率に有意な相関は認められなかった。女子の4-5年生では身長と95%信頼楕円面積に正の相関が認められた。3-4年生では、平均移動速度、Y軸平均移動速度の変化率は有意な減少が認められたが、体格変化率と平均移動速度、Y軸平均移動速度の変化率は正の相関が示された。

【結語】

学年進行に伴い平衡機能は向上する傾向にあった。身体成長期には、一時的に平衡機能が低下することがある。身体が大きく変化する時期では転倒やスポーツ傷害の予防に十分な配慮が必要と考えられる。

ランチオンセミナー

(12:25~13:25)

演題名：「関西におけるスポーツ医・科学支援体制の新たな取り組み」

所属名：京都トレーニングセンター センター長

氏名：馬淵 博行

【抄録】

京都トレーニングセンターは京都府によって設置となり2016年に開所された次世代アスリート（パラ含む）の強化・育成のみならず健康体力向上を支援する施設です。2023年度にスポーツ庁事業「地域におけるスポーツ医・科学サポート体制構築事業」に京都府として申請し、選定となりました。今回は、京都トレーニングセンターとしてこれまで取り組んでいる内容について発表させていただきます。

シンポジウム

(13:35~17:25)

シンポジウム1（テーマ）：傷病予防を体系立てて考えるー一次予防と二次予防

演題名：「傷病予防の考え方と、中学における一次予防としての授業実践」

所属名：国立大学法人奈良国立大学機構 奈良教育大学

教育学部 保健体育講座 教授

氏名：笠次 良爾

【抄録】

現在、学校やスポーツ現場では傷病予防のための様々な取組が進められているが、これらの取組は一次予防から三次予防までの時系列と、保健管理・保健教育（または安全管理・安全教育）という2つの観点から整理し、俯瞰的に見ることができる。さらにこれを指導者やサポートスタッフだけでなく選手や子ども達も一緒に行うことが重要である。この基本的な考え方について説明し、合わせて一次予防として中学校の体育理論授業における「スポーツの安全な行い方」の授業実践について紹介する。

演題名：「奈良県における野球肘検診 14 年間の取り組み」

所属名：宇陀市立病院 整形外科部長 兼 奈良肩関節センター センター長

氏名：江川 琢也

【抄録】

奈良県では 2011 年より野球肘検診を開始し、年 1 回のペースで検診を実施し、現在まで 14 回検診を実施してきた。検診参加選手はのべ 8000 名を超え、これまでの取り組みについて振り返る。また、野球肘検診は今回のシンポジウムのテーマである傷病予防の 3 つのフェーズでは早期発見・早期治療という点から二次予防に当たる。我々の検診ではストレッチング指導も実施しており、これは一次予防に当たる。野球肘の一次予防・二次予防という点からも話をしたい。

シンポジウム2（テーマ）：傷病予防を体系立てて考える－二次予防

演題名：「EAPに関する学術情報のレビュー」

所属名：トヨタ記念病院 トヨタアスリートサポートセンター

アスレティックトレーナー

氏名：村田 祐樹

【抄録】

Emergency Action Plan (以下 EAP) とはスポーツフィールドで重篤な外傷が発生した場合を想定して、救急対応に関わる人・物・情報を整理し、文書化したものである。EAP の目標は傷病者の状態を悪化させず且つ迅速に傷病者を救急隊に引き継ぐことである。

そこで本講演では、国内外の EAP に関する学術情報を整理し、EAP に掲載すべき項目、EAP を運用するための必要条件を明らかにしたい。また EAP の有無と死亡事故との関連性についても考察を加えたい。

演題名：「スポーツ現場におけるファーストエイド-PHICIS JAPAN の取組み-」

所属名：PHICIS JAPAN 理事 立命館大学スポーツ健康科学部

氏名：篠原 靖司

【抄録】

我が国のスポーツ現場におけるメディカルサポート・ファーストエイドを充実させるべく、2021年にPHICIS (PRE HOSPITAL IMMEDIATE CARE IN SPORT) JAPANが設立された。ラグビー競技を中心に、現在では様々な競技に従事するメディカルスタッフが講習会を修了し、活躍している。今回、PHICIS JAPANの取組みを紹介し、実際のスポーツ現場での活動には何が求められているかを考えたい。

シンポジウム3（テーマ）：傷病予防を体系立てて考える－三次予防と連携

演題名：「子どもが自分のケガに主体的に関わる環境作り」

所属名：学校法人明昭学園 岩倉高等学校 保健相談部部長
養護教諭・保健体育科教諭・コンディショニングアドバイザー
氏名：金澤 良

【抄録】

本発表では、本校における「SCHOOL HEALTH SCALE®」というコミュニケーションツールの導入を紹介する。SCHOOL HEALTH SCALE®は、受傷直後（レベル1）から競技復帰（レベル6）までのリコンディショニング段階を1～6の数字で示すツールである。本ツールにより、知識の乏しい子どもでも医療者との会話が容易となり、主体的なリハビリテーションへの理解と取り組みを促進する。また、回復状況を簡単に把握できるため、復帰時期の予測や関係者への報告・連絡・相談がスムーズに行える。本発表では、SCHOOL HEALTH SCALE®の導入による生徒の変化や、医療者に期待する知識の乏しい子ども達への関わり方について提案する。

演題名：「学校現場における認定スクールトレーナーの役割」

所属名：北里大学 医療衛生学部 リハビリテーション学科 理学療法学専攻 准教授

氏名：渡邊 裕之

【抄録】

現代の子どもが抱える問題は過度な運動を行う集団と運動を行わない集団の二極化にあると考えられている。運動器の健康・日本協会認定スクールトレーナーは、過度な運動による発育の障害やスポーツ外傷・障害を予防し、運動を行わない集団に対しては効果的な運動の導入を指導している。まだ産声を上げて間もない資格制度ではあるが、様々なモデルケースを通じて児童・生徒の健康管理の改善を目指している。

関西臨床スポーツ医・科学研究会